

福井県医師会

だより

第697号 令和元年(2019)7月



群青の線形

福井市 平野 治和

表紙写真説明：群青の線形

福井市 平野 治和

一番好きな色は、「ウルトラマリンブルー」で、“いのち生み出す青”という感じです。

天然の原料はラピスラズリで、アフガニスタンでしか産出しません。

それが海路で運ばれたため、「海（地中海）を越えて（来た青）」という意味です。「高松塚古墳壁画」に使用され、フェルメールの絵には多用されています。私が使うのは普通のアクリル絵の具です。

医 縫 録

乳がん検診 今昔

福井県がん検診精度管理委員会乳がん専門部会長
福井県済生会病院副院長 笠原 善 郎



私は昭和58年外科に入局しましたが、胃がんや肺がんばかりで、これほど乳がんが増えるとは全く予想していませんでした。今は11人に1人が乳がんとなり、全国で86,500人が罹患し、14,800人が亡くなる時代です。しかも40歳代の女性が最も罹患率が高く、働き盛りの女性の乳がん罹患は個人の問題だけではなく、家庭的、地域的さらには社会的問題としてとらえなければなりません。

さて、2000年がマンモグラフィ検診元年です。この年、老健65号でマンモグラフィ検診が全国に通達され、福井県でも2001年11月より開始されました。私はこの頃、福井県外科医会の乳腺担当幹事でシステム導入に携わりましたが「精度管理」という言葉に初めて出会いました。がん検診の目的はがん死減少であり、「①有効な方法」で「②正しく実行する」ことが目的に到達できる唯一の道だということです。もちろん①は科学的根拠のあるマンモグラフィで、②が精度管理ということになります。さらに「③受診率50%以上」が条件として加わります。がん検診のホップ・ステップ・ジャンプ（前国立がん研究センター社会と健康研究センター部長 斎藤 博先生）です。

この精度管理に関して乳がんは五がんの中でもしっかりと体制が整備されていると認識しています。マンモグラフィ検診精度管理中央委員会（精中委）が全国的に精度管理を推進し、読影医師のみならず、撮影技師、撮影機器などの資格を厳しく設定したからです。どれだけ乳がんの経験を積んだベテラン医師でも読影試験に合格しなければ検診マンモグラムは読ませないシステムは当初反発もあったようですが、現在はしっかりと根付き、認知されています。個人的にも当初からこの精中委の仕事に携わることができ、また対策型検診の精度管理に関わる国立がんセンターの厚生労働省研究班（斎藤班）やJ-START（大内班）にも参画する機会を得、これまで検診畑をずっと歩いてきたことになります。

もうじき2020年に達しマンモグラフィ導入20年になります。福井県の現状はどうかというと、2014年には496名が乳がん罹患し86名が亡くなっています。マンモグラフィ検診が始まる前の2000年にはそれぞれ244名、55名ですので、罹患は2倍に増え、死亡数は1.5倍に増えています（福井県がん登録）。乳がん検診の受診率は2017年度で47.8%（福井県健康増進課資料）ですのでかなり50%に近付いているのですが、それよりも乳がん増加の勢いがまだまだ強いという印象です。

今後は、まず、乳がんの一次予防にもっと力を注ぐべきかもしれません。食生活の欧米化は重大な要因であり、日本食のすばらしさはぜひ見直す必要があると思います。二つ目は、やはり乳がん検診の継続と受診率向上です。2000年当時では乳がん死亡の減少に貢献しているのは検診44%、薬物治療の進歩56%とされました。その後急速に薬物治療が進歩しましたが、2012年の段階でその貢献度は検診37%、薬物治療の進歩63%とされ、検診の重要性はいまでも失われていません。

ただしがん検診には利益ばかりではなく不利益があるということは、検診提供側のみならず受診者にもはっきり理解して頂きたい点です。3大不利益とされる①過剰診断②偽陽性③偽陰性は、検診提供者側でもまだまだ理解が不足しており、ただ「受けろ受けろ」ではなく、今後は受診者も理解して、納得して検診を受ける時代に来ていると思います。

そのような思いも含め、第29回日本乳癌検診学会総会が本年11月8日（金）～9日（土）に福井市（商工会議所、AOSSA、ハビリン等）にて開催されます。テーマは「みんなでもっと知ろう、わかって受けよう乳がん検診」です。ぜひご参加いただければ幸いです。